

# 第23回

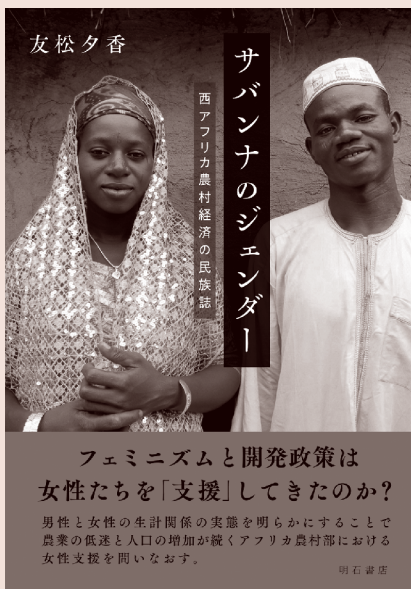
# 国際開発研究大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 FASiD

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第23回(2019年度)の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。



友松 夕香 著

『サバンナのジェンダー - 西アフリカ農村経済の民族誌』  
(明石書店) 2019年

## これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著 『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』 農林統計協会 1997年  
原 洋之介著 『開発経済論』 岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著 『開発の政治経済学』 日本評論社 1997年  
深川由起子著 『韓国・先進国経済論 - 成熟過程のミクロ分析 -』 日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著 『中国経済発展論』 有斐閣 1999年  
辻村英之著 『南部アフリカの農村協同組合 - 構造調整政策下における役割と育成 -』 日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著 『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』 日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著 『開発のミクロ経済学』 岩波書店 2001年  
西川 潤著 『人間のための経済学 - 開発と貧困を考える』 岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著 『女性が語るフィリピンのムスリム社会』 明石書店 2002年  
脇村孝平著 『飢饉・疫病・植民地統治 - 開発の中の英領インド』 名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著 『図説アフリカ経済』 日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著 『長期経済発展の実証分析』 日本経済新聞社 2003年  
安原 毅著 『メキシコ経済の金融不安定性』 新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著 『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動: 貧困削減のための基礎研究』 京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著 『村の暮らしと砒素汚染 - バングラデシュの農村から』 九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著 『牧畜二重経済の人類学 - ケニア・サンプルの民族誌的研究』 世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著 『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』 The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著 『現代アフリカの紛争と国家 - ポストコロナル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』 明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著 『カーストと平等性 - インド社会の歴史人類学』 東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著 『経済大国インドネシア - 21世紀の成長条件』 中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著 『障害と開発の実証分析 - 社会モデルの観点から』 勁草書房 2013年  
山尾 大著 『紛争と国家建設 - 戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』 明石書店 2013年
- 第18回 柳澤 悠著 『現代インド経済 - 発展の淵源・軌跡・展望』 名古屋大学出版会 2014年
- 第19回 古川光明著 『国際援助システムとアフリカ - ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』 日本評論社 2014年
- 第20回 宮城大蔵編著 『戦後日本のアジア外交』 ミネルヴァ書房 2015年
- 第21回 田中由美子著 『「近代化」は女性の地位をどう変えたか - タンザニア農村のジェンダーと土地権をめぐる変遷』 新評論 2016年
- 第22回 佐藤 仁著 『野蛮から生存の開発論 - 越境する援助のデザイン』 ミネルヴァ書房 2016年  
堀江未央著 『娘たちのいない村 - ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』 京都大学学術出版会 2018年

## 審査委員選評

本書はガーナ共和国北部の西ダゴンバ地域を対象にしたフィールドワークの成果である。総計22ヵ月に及ぶ現地調査に12年間にわたる思索を重ねた、著者渾身の作品である。「民族誌的手法は、実態の複雑さを描くだけでなく、政策の前提となっている定説を覆す新たな仮説や見解を現場から導き出すことができる」という言説を、見事なまでに実践した作品である。アフリカの農村女性をめぐる「定説」とは、「女性の周縁化」論(ボズラップ)、「女性の従属」論(フェミニスト人類学)、「資源配分の男女格差」論(バーゲニング・モデル)等に代表される議論であるが、これら既存研究には男性と女性の多面的で複雑な両義的関係性をとらえる「総合的な視野」が欠けていると著者は批判している。

本書は3部構成である。第1部では、ダゴンバ地域では1980年代から徐々に女性が自分の畑をもち耕作をはじめようになったことと背景や要因が歴史的な観点から考察されている。人口の増加が土地利用の変化、主食用作物の変化、そして男性を中心として出来上がってきた耕作技術の陳腐化をもたらししたこと、他方で女性が担う家事仕事の効率化やトラクター賃耕が普及したことが指摘されている。第2部では、農村部の暮らしにおける資源配分の在り方とその経緯が考察されている。第3部では、1980年代以降に顕在化した、労働と作物をめぐる社会関係の密な発展が考察されている。耕作者が収穫を手伝った者へ収穫物の一部を分け与える慣行(サヒブ)の多様性が、ジェンダーの観点から描き出されている。こうした「厚い記述」を通して筆者は、女性たちが従来の仕事に加えて耕作という男性の仕事に「上乗せ」することになり、女性の負担が増す方向で男性と女性の生計関係が展開してきたと結論している。そして、「女性たちの人生における選択の幅」を広げるためには、「女性を支援する政策として、男性の耕作を支援する(男性たちの穀物の生産性を高める)」ことが必要だ、という刮目すべき政策提言を行っている。

きわめて質の高いフィールドワークによって支えられた、開発援助政策の再考を促すほどの説得力を持った、大来賞受賞にふさわしい作品である。本書のようなすぐれた作品が世に出たことを心から喜びたい。

(絵所 秀紀)

## 受賞者の言葉

この度、著書『サバンナのジェンダー – 西アフリカ農村経済の民族誌』が国際開発研究大来賞をいただくことになり、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、ならびに、この研究を支えてくださったすべての皆様と諸機関に心より御礼と感謝を申し上げます。

本書は、ガーナ北部の農村部を舞台に、男性と女性の不可分な生計関係とその変容を、1970年代からの転換期に着目して描いた民族誌です。農村経済とジェンダーをテーマに、ちょうど同じ時期より台頭した「フェミニズムと開発」の政策のパラダイムに対して、とくに女性の日々の労働に焦点をあてて批判的考察をしたものです。

私が本書でまず投げかけたのは、方法論への問いです。国際開発の分野にかぎらず、社会科学的研究では、モデルや概念の使用は、現実を理解し、問題を解決するための示唆を得るうえで重視されています。しかし、モデルや概念と現実との「ずれ」はもとより、その理論的な解釈の力は、実態とは大きく異なる像を伝え広めてきました。そして、誤認にもとづく開発の実践においてはさらに、想定外の事態をもたらししてきました。たとえば、「世帯」という概念ですが、この用語の使用による誤認の問題は、とくにアフリカの農村研究で顕著です。

アフリカの農村部の同居家族の構造はきわめて多様であり、複雑で流動的な場合が多いからです。そして、人びとは、個人として、性別、身分、地位、年齢、関係性に応じて、親族をふくむ多くの他者と、家の枠組みを超えて生計関係を築くことで、日々、生活を明日につなげているからです。また、アフリカ各地の農村部の暮らしのジェンダー関係を理解するとき、「女性の周縁化」や「女性の抑圧」など、異なる地域で構築された理論や特定の意味を獲得した概念に依拠した普遍主義的な分析手法、あるいは「アフリカ」といった大きな地域枠組みで一般化された理論がいったいどれだけ有効なのか、疑問をもつことは重要だと思います。

以上の問題意識のもと、私が試みたのは、既存の理論や概念ではなく、現地の人びとの言葉と実践をもとに、日常の暮らしを掘り下げて検討しなおすことでした。ここから明らかになったのは、まず、農業とジェンダー開発の分野で「格差」問題とされている資源配分の男女間の「差異」は、双方の権力関係に着目することでは理解できないことです。本書では、これは、サバンナ地域の同居家族の生存戦略や称号の獲得をめぐる文化的実践に根差しており、作物の分け合いを通じて女性の不利益をもたらししてきたわけではないことを指摘しました。また、1970年代からの人口増加や農業の低迷の過程で、夫や息子、父親など生計を緊密にする家族の男性の農業生産の不足を補うために、女性たちが自ら農業労働を強化してきたことを明らかにしました。そして、ちょうど同じ時期より始まった、女性の農業を後押し、女性たちにも歓迎されてきた女性支援の開発政策は、この女性たちの経済的な負担の増強と労働の過酷化に加担してきた矛盾を指摘しました。これらの点をより明確にするためにも、本書では、地域間や農村と都市間の経済格差、若者たちの「失業」、女性たちの「出稼ぎ」など、今日のアフリカの農村部の暮らしをより広い文脈で理解するうえで重要な経済の変容と不平等について、マクロ分析を加えつつ、当事者の視点から具体的に記述しています。本書が描いた女性たちが直面している日々の労働の現実には、ガーナ北部だけではなく、グローバルサウスに共通する問題であり、これに私たちも深くかかわっています。

国際開発では、ジェンダー平等という価値のもと、女性の経済活動を拡大させる政策支援がますます重視されています。しかし、既存の社会のあり方を「修正」するジェンダー政策が、同時進行している経済変容の過程で女性たちに約束した福利の向上さえもたらししていないとき、私は今一度立ち止まって政策そのものを再考しなければならないように思います。この受賞をきっかけに、これまでジェンダーと開発をめぐる問題に取り組んでこられた研究者や実務家の方々とともに、より広い文脈で複雑な問題系の理解を深め、議論を喚起できることを願っています。

友松 夕香



## ともまつ ゆか

大分県出身。2001年にカリフォルニア大学バークレー校政治学部を卒業後、ブルキナファソで青年海外協力隊として活動。2015年に東京大学で博士号(農学)を取得。東京大学東洋文化研究所(日本学術振興会特別研究員RPD)、プリンストン大学歴史学部(ポスドクフェロー)を経て、現在は京都大学人文科学研究所(日本学術振興会特別研究員PD)に所属。

## 主要著書

「執拗な共食」『再分配のエスノグラフィ』(浜田明範編、悠書館、2019年)、「人びとの過去に接近する」『歴史書の愉悦』(藤原辰史編、ナカニシヤ出版、2019年)、「Parkia biglobosa -Dominated Cultural Landscape: An Ethnohistory of the Dagomba Political Institution in Farmed Parkland of Northern Ghana.」Journal of Ethnobiology 34.2 (2014)、「研究は実践に役立つか?」『フィールドワークからの国際協力』(荒木徹也・井上真編、昭和堂、2009年)など。

## 第23回 応募作品の傾向と選考経緯

2018年4月から2019年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、34作品の推薦・応募があった。

本年度は対象地域としては一国のみではなく、複数の国/地域を取扱う著作が半数程あった。アジア地域を取扱う作品は引続き多く、アフリカ地域についてはルワンダ、ケニア、スーダン等の一国を取扱う作品が多かった。中国は減じて2作、中東・ラテンアメリカについては各1作であった。

分野については、経済/財政は例年同程度数の5作、開発一般9作（ジェンダー、バリアフリー含）、政治7作は増加であったが、環境/資源が昨年の9作から減じて3作（特に資源）、教育3作（昨年1作）は増加であり、今年の特徴であった。

FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作品に加えて下記4作が最終審査対象として選出された。審査者からは、「いずれも労作、良書であった。」と総評が出された。審査過程における委員による意見はおおよそ以下のとおりである。（書名五十音順）

『アフリカ・サバンナの現在史－人類学がみたケニア牧畜民の統治と抵抗の系譜』（楠和樹著、昭和堂）は、一見、特定地域を対象とした牧畜民の人類学研究と思われるが、今につながる開発における国家の役割を考えるうえで、重要な視点を提起しており、開発関係者にとって気づきが多く、普遍性ある研究である。広範な資料読み込みとフィールドワークに基づき、ケニア北部乾燥地帯の国家による統治と人々の抵抗を見事に描き出した労作である。

『グローバル・タックスの理論と実践－主権国家体制の限界を超えて』（上村雄彦編著、日本評論社）は、SDGs達成における地球規模課題を解決するための資金動員は重要であり、グローバル・タックスの歴史的発展、可能性と限界について明らかにしている。主権国家の抵抗をいかに克服するかについて今後の提言を期待する。

『人道支援は誰のためか－スーダン・ダルフルの国内避難民社会に見る人道支援政策と実践の交差』（堀江正伸著、晃洋書房）は、国内避難民に対する支援のあり方を、国連諸機関によるこれまでの支援の経験を踏まえながら検証し、さまざまな有益な提案を行っている。アクセスの困難なダルフルの事例研究は、ルポルタージュの域に止まっているとはいえ、極めて貴重である。

『ミャンマーの法と開発－変動する社会経済と法整備の課題』（金子由芳著、晃洋書房）は、法制度に関する本であるが、国づくりの考え方という開発の根本のところから深い考察がなされている。日本は様々な国で法整備支援を積極的に行っており、このような考察は、今後の支援方向性検討に際し役立つであろう。近年ある外資法等の解説文書とは異なる深み、斬新さがある。

### 【第23回（2019年度）審査委員会】

- 委員長 杉下 恒夫（FASID理事長）  
 委員 絵所 秀紀（法政大学名誉教授）  
 大野 泉（JICA研究所 研究所長、政策研究大学院大学客員教授）  
 北野 尚宏（早稲田大学理工学術院国際理工学センター教授）  
 滝澤 三郎（認定NPO法人国連UNHCR協会特別顧問、東洋英和女学院大学院客員教授）  
 藤田 伸子（FASID専務理事）

## 表彰式・記念講演会 ご案内

案内状	<a href="https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/3_index_detail.php">https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/3_index_detail.php</a>
日時	2019年12月24日（火） 13:00~15:00
講演	<b>労働の女性化－アフリカの経済変容、農業とジェンダー政策の今後を考える 友松 夕香</b> 開発政策は、女性たちを「支援」してきたのか？ 1970年代より、ガーナ北部の農村部は人口増加と農業の低迷を経験してきた。この過程で、不足に苛まれた女性たちは農業労働を強化させ、日々の経済的な負担を自ら増やしていった。本講演では、著書『サバンナのジェンダー』をもとに、同時期より各地で始まり、女性による農業生産を後押ししてきた開発政策の矛盾を浮き彫りにする。そして、現在のジェンダー政策の動向と「農業の女性化」をめぐる議論を踏まえ、急激な経済変容の最中にある21世紀のアフリカの農村女性の労働の行方を考察する。
会場	FASIDセミナールーム（東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階） <a href="https://www.fasid.or.jp/access/">https://www.fasid.or.jp/access/</a> （日比谷線神谷町、大江戸線赤羽橋）
参加費	無料（要申込み・座席定員制） 式典・講演に続いて懇談会を同会場で開催します。
締切り	2019年12月20日（金）（定員に達した時点で受付を終了します）
申込み	お名前・ふりがな、ご所属、電話（昼間連絡できる先）を事務局へemailにてお送り下さい。 FASID国際開発研究 大来賞事務局（服部） email: <a href="mailto:okita@fasid.or.jp">okita@fasid.or.jp</a> / Tel: 03-6809-1997

# 国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

## 受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。

第24回(2020年度)についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

### 対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く)であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。
- (2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2019年4月1日から2020年3月31日までの間に、初版が国内で市販されたもの。

### 大来 佐武郎(おおきた さぶろう)氏

1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める(～80年)。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

### 審査・表彰

- 表彰** 審査委員会で選考された作品に対し、正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。
- 審査** 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

### 推薦・応募

推薦者(自薦・他薦可)は、所定の「推薦書」へ入力し、email添付にて送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦してください。なお、推薦書類・当該図書は返却しませんのであらかじめご了承ください。

**推薦書** ダウンロードしてください。

[https://www.fasid.or.jp/okita\\_memorial\\_prize/2\\_index\\_detail.php](https://www.fasid.or.jp/okita_memorial_prize/2_index_detail.php)

**締切** 2020年5月末頃

### 受賞作品の発表と表彰式

2020年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式を行います。(予定)

### 推薦・お問合せ先

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究大来賞 事務局(服部)

TEL: 03-6809-1997 / email: okita@fasid.or.jp

本事業には公益財団法人 三井住友銀行国際協力財団による助成を受けています。

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究センター

国際開発研究 大来賞 事務局(服部)

〒106-0041 東京都港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階

Foundation for Advanced Studies on International Development

email:okita@fasid.or.jp TEL:03-6809-1997 FAX:03-6809-1387 <http://www.fasid.or.jp>